
FOREVER

Wetec

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FOREVER

【Nコード】

N1053H

【作者名】

W e t e c

【あらすじ】

漆黒の追跡者の後の話。東都タワーにいた男の正体を組織が調べ始める。

第一話

へりが墜落する直前、ジンたちはかろうじて脱出することができた。

「いったいあいつは何者なんだい。」、タトウをあしらった女が言った。

「さあな。これから調べるつもりだ。それより奴があそこにいたってことは俺たちのことを知っているようだな。」銀色の長髪の男が言った。

「殺っちまうんですかい?」、サングラスをしたがたいのいいの男が言った。

「ああ、組織のことを知っている奴をそのまま野放しにするわけにはいかないからな。」「オレ、アイツ、殺す。」、もう一人の男が言った。

「それより兄貴、いったいどうやって調べるんですかい?」

「心配するな、当てなんざいくらでも転がってるぜ。」

男たちはその場から立ち去った。

第二話

「墜落したヘリからは誰も発見されなかったようじゃ。それに松本管理官は自分を襲ったやつらを見てないようじゃ。」博士はコナンと灰原に話しかけた。

「どうやら墜落するまえに脱出したみたいね。」博士の言葉を受けて灰原がそう答えた。

「ああ。」コナンはアイリッシュが死ぬ間に言った言葉を思い出していた。

「いつまでも追いつけるがいい、工藤新一。」

「追いつけてやるさ、いつまでも。」コナンはそう心に固く誓った。

「それより工藤君、奴らに姿は見られなかったの？」

「心配するなつて。もし奴らが気づいてたんならもう行動をおこしてるだろうしな。あれから一週間たって何もないってことは大丈夫なことだろ。」コナンは灰原の問いに対してそう答えた。

・ 警視庁

「あの男の身元は分かったのか。」、松本管理官は目暮警部に訊いた。

「いえ、いまのところまだ分かっていません。しかしどうして管理官に変装を？」

「分からんな。しかしあの男がわしに変装し、今回の事件を探っていたのならやつは今回の事件と何か関わりがあるはずだ。もういちど周辺を洗ってくれ。」

「分かりました。」

目暮警部はこう答えたがそれでその男の正体がわかるはずがなかった。

・ 捜査一課

「ということで、もう一度周辺を洗ってみてくれ。もしかたら見落としてたものがあるかもしれないから。」目暮警部は部下たちにかこう言った。

「あのー。」、高木刑事が手を挙げた。

「どうしたんだね高木君？」

「コナン君と蘭さんなら何か知ってるんじゃないですか。二人ともあの場所にいましたし何かあの男と話したかもしれませんし。」

「そうだな。佐藤君、高木君。君たちはコナン君たちから何か知っていることはないか訊いてきてくれ。」

「分かりました。」、二人は部屋から出て行った。

第三話

・ 帝丹小学校

「何も入ってねえーぞ・・・」 元太が自分の下駄箱をのぞきながら言った。

「今日も依頼ゼロですか。」 光彦が言った。

「つまんないの。」 歩美が残念そうに言った。

「まあ、それだけ平和ってことじゃない？」 灰原が答えた。

「そうそう、テレビの世界じゃあるまいしそんな事件なんて頻繁にはおきねえーよ。」 コナンが言った。

「あら、でもあなといるとよく事件に遭遇するわよね。」 灰原はコナンに対して言った。

「悪かったな。」 コナンが答えた。

「あー！高木刑事だ！」いつものようにみんなで帰ろうとしていると高木刑事が校門の前にいた。

「何かあったのか？」 元太が高木刑事に訊いた。

「まさか学校で事件が！」 光彦が言った。

「いや違うよ。今日はちょっとコナン君に用があつてね。」

「え！僕に？」 コナンは少し驚いた。

「そうだよ。でもここじゃちょっと話にくいから場所を移そう。みんなは先に帰っててね。」

「はい。」 元太たちは先に帰って行った。

（俺に用って一体なんだろう？まさか俺の正体が！・・・って、んなわけねーよな。）

「ちょっと君に訊きたいことがあってね。」 高木刑事は言った。

「何？」 コナンは訊いた。

「この前、東都タワーにいた男のことなんだけど身元が分からないんだ。いつもならここまで詳しくは調べないんだけど、その男は松本管理官に変装していたし、何かあるんじゃないかと思って調べてるんだ。」

「そうなんだ。で、僕に訊きたいことって？」 (アイリツシュの事か。警察が調べても分かるはずないよな。でもアイリツシュの事訊かれてもさすがに組織のことは言えねーよな。)

「コナン君はあの時そこにいたよね？何かあの男について知っていることとか、気づいたこととかないかい？」

「ううん。分からなかったよ。」

「そうかい、ありがとう、コナン君。何か気付いたことがあったら連絡してね。」

「うん、分かった。」

高木刑事はコナンと別れた。(何も分からなかったか。でも、コナン君、あそこにいたってことはまた事件を解いてたんだ。相変わらずすごいな、コナン君は。一体何者なんだろう？)

・ 阿笠邸

「それで、高木刑事に何を訊かれたの？」 灰原がコナンに訊いた。

「ああ、例の事件のことさ。アイリッシュのことを警察が調べているらしい。でもいまのところ何の手がかりもないみたいだぜ。」

コナンは答えた。

「そう、まあ組織のことだからそんな簡単には分からないでしょうね。」

「そうだな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1053h/>

FOREVER

2010年10月11日16時19分発行